共生委員会ニュース

ともしび

2023 年度　第４号

2024 年 3 月

共生探究学習委員会



高校生まちづくりコンテスト決勝大会の様子

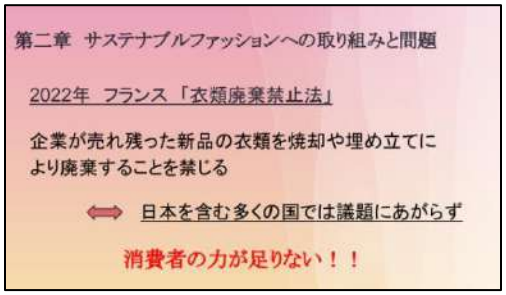
平和共生論文代表者発表会

先月の 2 月 15 日、2 年生の LHR の時間に、72 期 3 年生の代表者による「平和共生論文代表者発表会」がおこなわれました。発表題目は以下の通りです。

K.H.さん「ファストファッション　価格の裏に潜む問題」

K.A.さん「海洋中の CO_2濃度増加における海洋生態系への影響」

H.D.さん「未来の情報社会と忍び寄る影」









ご自身の論文の内容だけでなく、資料集めの秘訣など体験者ならではの話をしてくださり、たいへん有意義な会でした。3 月 14 日には 1 年生に向けて、S.H.さんが**「多様性を尊重しあえる社会を作るために」**、U.A.さんが**「識字率から読み解く教育格差」**、U.A.さんが**「軽微な発達障害児への支援の在り方」**と題して、発表して下さる予定です。
1 年生のみなさん、楽しみにしていて下さい。

修学旅行 平和講話を聞いて

2 年 F.M.

今回私は、初めて被爆した方の話を直接聞きました。今まで原爆のことについて色々なことを学んできたつもりでいましたが、お話を伺って、これまで自分が学んできて想像していたことを越える原爆の悲惨さを思い知りました。

まず私が衝撃を受けたのは、空襲警報のお話です。訓練では見つからないような服装をし、近くに爆弾が落ちると目が飛び出し、鼓膜も破れてしまうので目も耳も塞いだ、とのことでした。想像できないほど生々しいお話から、改めて爆弾、戦争の恐ろしさを痛感しました。

そして原爆投下の8月9日。実際に体験した人にしかわからない恐怖が、羽田さんのお話から伝わってきました。小学3年生だった羽田さんが、日ごろから先生に言われていた「防空壕に」という言葉をすぐに思い出し、お母さんを探して防空壕に逃げたということは、ふだんの学校での訓練がどれだけ行われていたかを考えさせられました。

そして最もショックを受けたのは、当時大学生だったお兄さんのお話でした。このお話を聞いている時には、正直言って耳をふさいで痛いほどの気持ちになりました。この状況を小学3年生という幼さで目の当たりにし、今も記憶に残っているというのはどれだけつらいことなのだろうと思いました。さらに羽田さんがお母さんについていき、実際に目にした光景は凄まじいものだったと思います。目が飛び出し、耳や腹がちぎれている、そんな光景は、平和な現代を生きている私たちには想像もできません。「水を飲みたい」という人に水を飲ませてあげると、次々に死んでいってしまう、と聞いた時には言葉を失いました。

そして、現在まで続いている原爆の被害についてもうかがいました。放射線のせいで亡くなった人は現在までに18万7000人以上いると聞き、驚きを禁じ得ませんでした。原子爆弾は今もなお作り続けられていて、広島、長崎の原爆の 50 倍近い威力があると聞き、絶対に使わせてはならないと思いました。

戦争を体験された羽田さんの言葉だからこそ、今この平和を守り続けていかなくてはならないことを、私たちに改めて考えさせてくださいました。羽田さんの貴重なお話を聞いて、戦争は絶対にしてはいけないものと痛感しました。





高校生まちづくりコンテストを終えて

3年S.M.（宮古訪問プログラム）

2 月 25 日、玉川大学にて第 3 回高校生まちづくりコンテスト決勝大会が行われました。私とHR301 A.I.さんのペアは、全 296 チームのうち 5 チームとして決勝進出し、「玉川大学教育学部長賞」をいただくことができました。応援してくださった方々、ありがとうございました。

今年度のテーマは、「ツーリズムを通じた自分たちの“まち”の活性化プランを考えよう」というものでした。「“まち”は、市区町村単位で考える」という文言を見て、高等部で 3 年間宮古訪問プログラムとして取り組んできた『岩手県宮古市』がすぐに想起され、朝比奈さんを誘ってコンテストにチャレンジしました。

目的としては「宮古を多くの人に知ってもらうこと」が第一にありました。東日本大震災だけでなく、宮古市そのものの魅力を多くの人に知ってもらうことは、風化する記憶を留め、広めていくことに繋がります。

コンテストを通じて、それは確かに実現されたと思います。コンテストがなければ繋がることのなかった方々と繋がることができました。宮古市に関わる方々は快く取材に応じてくださり、コンテスト前後で大変温かい言葉をかけてくださいました。また、昨年の優勝校の群馬県立大間々高等学校のSさんをはじめ出場校の皆さんの、原稿を全て覚えて望む勇気や本気度、調査における行動力から、沢山の刺激を受けました。彼らと連絡先まで交換でき、今後の活動において非常に有意義でありました。

加えて、高等部 3 年間様々な活動を共にしたAさんと高校最後に同じステージに立てたことにも喜びを感じています。（文化祭実行委員会では大変苦労をかけてしまったので。）

コンテストを終えて、3 つの賞に入れなかったという一抹の悔しさはありますが、その悔しさが原動力になるからこそ、これからも前に進んでいけるのだと思います。神様は乗り越えられる人に、乗り越えられる試練しか与えないのではないでしょうか。

主に 1、2 年生の皆さん、高等部生活の一瞬一瞬を大切に、やりたいと感じたことを全力でやり切りましょう!そうすれば、高等部生活に後悔が残ることはありません。3 年生の皆さん、それぞれが進む道を自分らしく歩みましょう。自らの内なる声こそが羅針盤だと思っています。

これからも宮古市と青山学院高等部の関係が永く続くことを祈りつつ、私個人として卒業後も宮古市との関わりを保ちたいです。





「防災士」取得しました！

3年 A.I.（宮古訪問プログラム）

皆さんは「防災士」という資格をご存知でしょうか。「防災」と聞くと、先日の能登半島地震を思い浮かべる方も多いと思います。「東京に首都直下や南海トラフがいつ来てもおかしくない」という事実を再認識させられた今、防災意識の向上がこれまで以上に求められます。ここで活きてくるのが、防災士としての知識です。私とSさんが、1 月末に防災士養成講座を受講、防災士資格試験に合格しましたので、その報告とともに資格の詳細についてご紹介します。

防災士とは、特定非営利活動法人、「日本防災士機構」が認定する民間資格です。防災の意識・知識・技能が習得できます。防災士になるには、機構が定めたカリキュラムを、自宅学習と会場講習を通じて履修し、会場講習の最後に実施される資格取得試験に合格する必要があります。資格試験の合格率は 90%程度と高く、受験の感想としては、専門用語が多く出題され、意外にも難しかったです。また、防災士認証にあたり、救急救命講習の受講が必要となります。私達は 1 日目の午前に講習を受けましたが、コースによっては救急救命講習が含まれておらず、別途受講する必要があります。

この講習の目玉は、著名な専門家の講義が生で聞けることです。私達のコースでは、帰宅困難者対策研究の東京大学廣井教授が講演をしてくださいました。私達も遭遇しかねない帰宅困難という状況において、大切なのは「家に帰らない」ことだそうです。人が密集した道路では群集事故が発生、二次被害の恐れがあります。実は、帰宅困難者を支援する施設が首都圏には多く存在します。しかし、そのサービスの理解・機能が不十分であることから、このままでは次の大規模災害に際しても大混乱は免れないと警鐘を鳴らされていました。

残念ながら、防災士という資格自体はまだ知名度も低く、資格自体にあまり効力はありません。「それでは取る意味がない」と思われるかもしれませんが、防災士の取得は「誤った認識を正すチャンス」です。講習でも、教授の方が「判断ミス一つが命取り」と仰っていましたが、災害時は迷い・ミスは許されません。かといって、「誰かの指示に従えば良い」という考えでは、自分の身を危険に晒しかねません。まずは自助、それから共助、が実践できるよう、改めて自分の防災対策を見直してはいかがでしょうか。その先で、防災の深い知識を得たい気持ちが起これば、ぜひ防災士に挑戦してみて下さい。



画像URL: https://m.facebook.com/JAPAN.BOUSAISI.SOCIETY/

